

K-807

大塚天神古墳

— 第2次調査概報 —



1999

山形県山辺町教育委員会

例言・凡例

- 1 本書は、山形県東村山郡大塚地内に所在する大塚天神古墳第2次調査の概要をまとめたものである。
- 2 平成9年11月に当町で開催したシンポジウムを経て、第1次調査概報で示した古墳年代観の変更をおこなっている。
- 3 調査は、山辺町教育委員会が主体となり、平成9年10月13日から11月18日までの期間に実施した。
- 4 第2次調査の体制は下記の通りである。

調査総括	絆谷四郎
調査担当	茨木光裕
調査員	高橋玄寿（現場主任）、後藤禮三、佐藤維雄、村山賢司、三浦浩人
作業員	伊藤重雄、伊藤豊、渡辺末吉、渡辺栄子、会田カネヨ、小間美乃子、峯田豊、高橋一雄、小間ハマ子
事務局	長岡順吾、渡辺直好、峰田順一、安孫子正治、垂石敏子、青木稔、武田忍
調査協力	小閑将（大塚地区総代）
- 5 発掘調査及び本書作成・出土埴輪の検討にあたり、加藤稔氏（東北芸術工科大学教授）、川崎利夫氏（県立うきむ考古資料館長）、阿古島功氏（山形大学教授）、手塚孝氏（米沢市教育委員会）、吉野一郎氏（南陽市教育委員会）、地元大塚地区、山形県教育委員会、

◆表紙 大塚天神古墳全景（東より）



▲ 平野部から望む菅沢2号

関係各位より御指導御協力を賜った。

ここに記して感謝申し上げる。

- 6 平成9年11月に「山辺'97埴輪シンポジウム」が開催され、大塚初重氏（明治大学名誉教授）、辻秀人氏（東北学院大学）、車崎正彦氏（早稲田大学）、藤沢敦氏（東北大）の各位より御指導を賜っている。

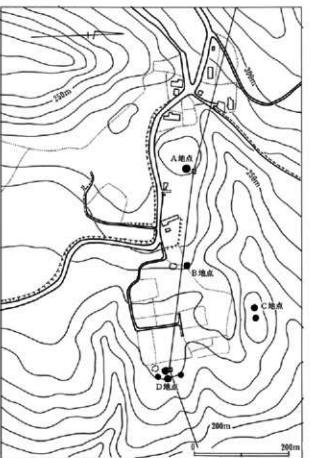
ここに記して感謝申し上げる。

- 7 本書執筆の基準は下記の通りである。

- (1) 掘団中の方位は、磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、 $N - 2^{\circ} 20' - E$ である。調査区は、樹木等のため必ずしもグリッド軸に沿っていない。
- (3) 調査区平面図、土層断面図は、1/20縮尺で採録し、適宜鉛筆にてスケールを付した。
- (4) 土色の色調は、「新版標準土色帳」1987版に掲載する。

- 8 出土遺物は、山辺町教育委員会が一括保管している。

- 9 本書の作成・執筆・編集は、茨木光裕が担当し、編集の補助を三浦浩人が行った。



▲ 第1図 要害古墳群分布図

I 古墳と集落について

(1) 古墳の分布

最上川の中流域に位置する山形盆地では、南の上山市土矢倉古墳群から北限の村山市名取古墳まで、30地点あまりの古墳（群）が知られている。さらに下流域の尾花沢や新庄盆地では、古墳や古墳時代集落の存在は確認できていない。

秋田県内でも、男鹿市小谷地遭跡や横手市オホン清水北跡などで古墳時代の集落が断片的に確認されてはいるが、その分布は、希薄で散発的である。現段階では、終末期を除く狭義の「古墳時代の古墳」は知られていない。そのような状況からすれば、山形盆地は、日本海側で古墳時代の集落と古墳の展開を系統的に把握し得る北緯の地域であると言える。

山形盆地の古墳の分布をみると、概ね、白鷹丘陵山麓部から須川西岸の地城、盆地東側の奥羽山系山麓部の地城、盆地東側に発達した扇状地扇端部に沿った平野部などの地域に点在する。

山形盆地西縁部には、山形市谷柏古墳群や普沢古墳群、大之越古墳、村木沢古墳群などがあり、山麓の丘陵上に連なり、山辺町要害、根岸、坊主堀古墳群へと続く。盆地東側の山麓には、高原古墳群、お花山古墳群、風間古墳などが分布する。一方、奥羽山系から流れ来る馬見ヶ崎川、立谷川、乱川の各河川が形成した扇状地扇端部の湧水帯に沿うように、五日町古墳、宮町古墳、狐山、衛守塚古墳群、上遠矢塚、下遠矢塚、成生古墳群などが分布する。特に南半部の山辺町～天童市以南の地域に多くが集中し、その分布は、北上するにしたがって希薄になる。村山市の大名古墳や近くの河島山丘陵にある河島山古墳群、東根市の平野部に立地する東根大塚古墳などが北緯部に位置する古墳（群）である。

一方、最上川左岸の地城では、寒河江市高瀬山古墳群以北には、古墳の存在が知られていないが、河北町の平野



▲ 要害古墳群の古墳

部には、古墳時代の集落もあり、沢畠からは、子持勾玉が出土している。同町には、造山という地名もあり、以前に削平されたとも考えられるが、今後注意する必要がある。

(2) 山辺町内に分布する古墳（群）

山辺町は、白鷹丘陵と須川に画され、山形市に隣接した西側に位置する。大塚天神古墳は、同町南郊の平野部にある大塚地内で新たに確認された古墳である。古墳は、東側に須川の氾濫原が広がる段丘崖に接した台地縁辺部に立地し、墳頂部に天満神社がまつられ、標高は約108mを計る。

山辺町には、この大塚天神古墳の他にも西側の丘陵山麓部にそって、要害古墳群や根岸古墳群、坊主堀・塙の山古墳群が分布する。塙の山古墳群の立地する山麓丘陵から平野部へ移った所には、削平されて詳細は不明である古墳と考えられる良実塙跡がある。

要害古墳群は、白鷹丘陵の山中に位置する山形市滝の平集落の東から盆地平野部に張り出す尾根筋にそって、4地点に墳丘の分布が確認できる。A地点は、尾根筋の最高所に位置し、径約18m、高さ約2.5mのおよよ円形の墳丘がある。B地点には、現在一辺約12m、高さ約1.5mの方形状の墳丘があり、周間に周溝状の凹みが巡る。

以前には、並列してもう1基の墳丘が確認できだが、削平され現存するのは、1基のみである。C地点にも、2基の墳丘の高まりが確認できる。

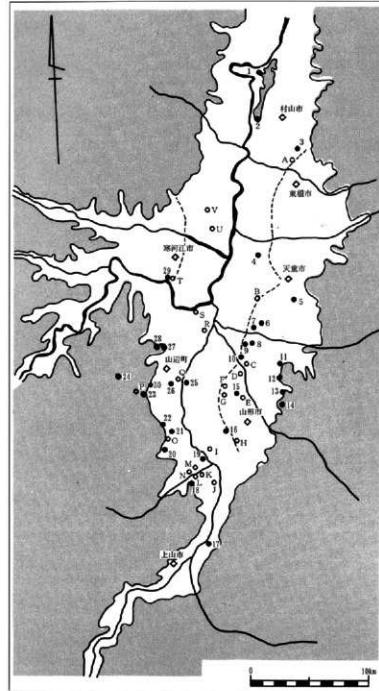
D地点は、両側を沢によって画された舌状に張り出す尾根の突端部に位置し、そこから急傾斜となって丘陵山麓に落ち込む。墳丘は、その縁辺に4基（若干の高まりがあり、可能性のあるものが他に1基）が確認できる。規模は10～15mで円形を呈し、周間に周溝と考えられる凹みがめぐらしく接しておらず、周溝の切り合いが認められる。これらの墳丘は、候東北電力の送電線鉄塔建設に伴う事前の確認調査で、盛り土であることが確認されている。

A、B、D各地点の墳丘頂部には、いずれも浅い凹地状の落ち込みがあり、中央部の凹んだドーナツ状を呈する。これは、後の人の為的な掘り込みではなく、木棺が腐食して陥没した結果と考えられ、要害古墳群は、木棺直葬の古墳群である可能性が高い。要害古墳群が分布する丘陵が落ち込んだ山麓のさらに北側、山辺町根岸地区に五つ森と称する箱形石棺を内部主柱とする古墳群があり、そのうちの石棺1基は、偏平な石材を組み合わせた170mm×42mm、深さ33mmほどの大きさで、副葬品はなく、人骨が若干出土したという。

坊主堀古墳群は、山辺町大寺地区の背後に連なる標高250m、比高約120mの丘陵上に分布する古墳群である。

そこから東へ張り出し、高度を下げた尾根の先端部に壇の山古墳群が位置し、坊主塚古墳群の一支群と考えられ、8基ほどの円墳があったという。坊主塚古墳群は、以前、四十八森と呼ばれたように、多くの墳丘があったが、大部分は削平され、径約10m程度の墳丘が僅かに残っている。そのなかで、1号墳は、昭和61年の墳形確認調査によって、主軸長約27.3mの日本海側最北限の前方後円墳と考えられている。詳細は省略するが、当該古墳群は、石棺と木棺直葬、両者の墳丘が存在したと考えられ、山形市お花山古墳群と同じような様相と思われる。

大塚天神古墳は、これらの古墳群の先駆をなした大型で古式の古墳であり、北側に位置する古墳時代の歴史的モニュメントとして、重要な位置を占めていると言える。



II 調査の経過

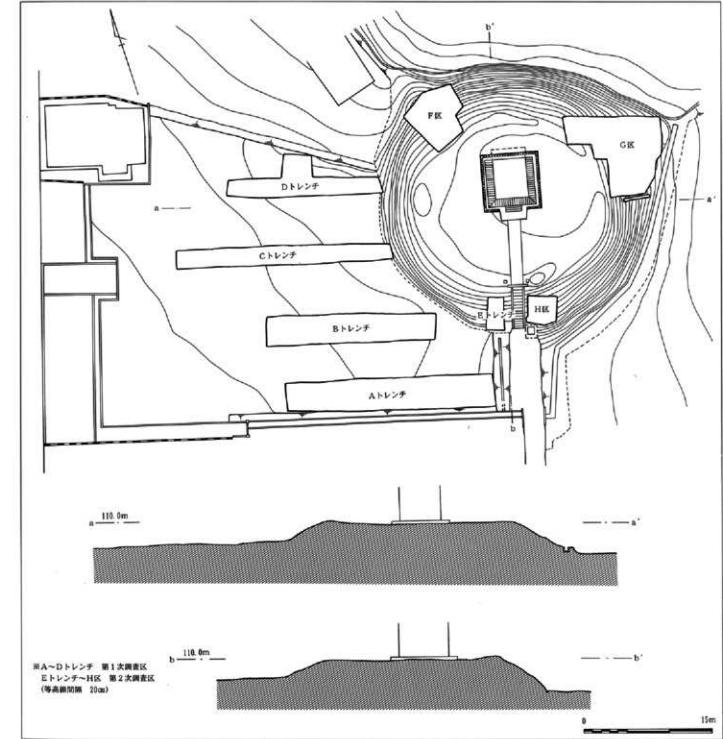
2次調査は、平成9年10月13日から開始し、同年11月18日に終了した。1次調査は、現在の墳丘西側に隣接する農村公園の造成に伴う事前調査であり、対象区域内に、A～Dトレントと称した4つの調査区を設定して実施した。

その結果、各トレントから明瞭な墳籠線を検出し、現在の墳丘はかなり削平を受けているが、本来は、径50m程度の円墳であったと想定された。

今次の調査は、1次調査の成果を受けて、墳丘東側を

対象として実施する予定ではあったが、民有地であり、現在、水田として耕作している状況であり、東側墳籠の状況を追及することは不可能であった。

現在の墳丘斜面を観察すると、部分的にテラス状の平場が認められる箇所があり、二段築成であったと予想されるので、今次の調査は、墳丘を主な対象として実施した。調査は、テラス状の平場が認められる4箇所にE～Hの調査区を設定し、墳丘面の検出と埴輪の設置された原位置の確認、一部、墳築成状況の検討などを主な目的として行った。



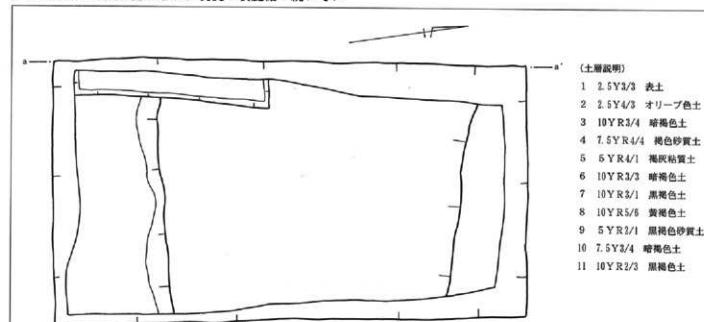
III 各調査区の概要

(1) Eトレンチ

Eトレンチは、参道石段に接した西側墳丘部に設定した4.5×2.5mの調査区で、樹木等のため実際の範囲区はそれよりも小さくなっている。概ね現況の墳頂肩部より僅かに下がった地点から、墳築部にかけた墳丘斜面に沿った地点にある。当初、トレントを設定した地点の現況の墳丘斜面、中位にテラス状の平担部が確認された。

それが、墳丘に伴う段築平面に当たるのかを検証する目的で調査を行った。

その結果、北側の現在の墳頂部からわずかに下がったところに傾斜変換部があり、トレント西端にも同様の傾斜の変換する地点が認められ、現況の墳築部へ続いている。



▲第4図 Eトレント平面図・土層断面図

く状況にある。

土層断面の検討によると、暗褐色を呈する締まりのないバサバサした土層（3層）の下位にある5層は、粘性のつよいブロック状に固まつた土層で、水田の耕作土に近いような感じを受ける。

トレント南端で認められる傾斜変換部についても、サブトレントを設けて下位の土層状況を検討したが、確実な積み土の状況は把握できなかった。これらの傾斜変換部は、本来の墳丘に伴うものとは考えられず、後世の改変によるものと思われる。特に、天満神社の石段造設時に、斜面を一旦削平し、その上に粘質の土を盛ってたたき締め石段を敷設したと考えられる。

Eトレントでは、特に参道の造設による改変によって、明瞭な墳丘面を検出することはできず、遺物も近世の陶磁器片が僅かに出土したのみである。



▲ Eトレント全景



▲ F区段築部状況

(2) F区

F区は、現在の墳丘の北西部に設定した調査区で、杉林の中にある。一部、現況の墳頂肩部を含んだ斜面に調査区を設けた。地形の状況をみると、F区付近一帯に、等高線の張出しがあり、その張出した部分にそって、テラス状の平担部が認められる。

調査は、面的な墳丘面の検出に努めたが、調査区が杉林の中であり、樹根が複雑に交錯し、かなり限られた範囲でしか調査ができなかつた。

F区では、表土を除くと、現在の墳頂肩部に対応する肩部の落ち込みがあり、緩やかに傾斜して斜面中程へ続く。地元の聞き取りによると、F区の墳頂肩部付近に以前、児童のための砂場が造られていたということであった。現況の地形の状況をみると、F区付近の墳頂肩部の等高線の流れが、張き出す直線的になっており、改変を受けた状況が推測できる。従って、墳頂肩部の状況は、砂場の造成等に伴う後世の所産であり、本来の墳丘の状況を反映したものではない。

また、調査区の西壁から拡張区東壁に連なる弧状の段状の落ち込みが検出され、その外側は比較的平担となっている。この部分は、現況で確認できるテラス状の平担面と対応している。落ち込み斜面にそって杉が植えられて、根が深く入り込んでいるため明瞭ではないが、調査区内で検出された平担面の最大幅は、約2.3mである。

遺物としては、墳頂肩部から近世の陶磁器、中段の落ち込み斜面や平担面から埴輪片数点が出土した。埴輪片は、いずれも浮いた状態で出土し、原位置を保っているものではない。

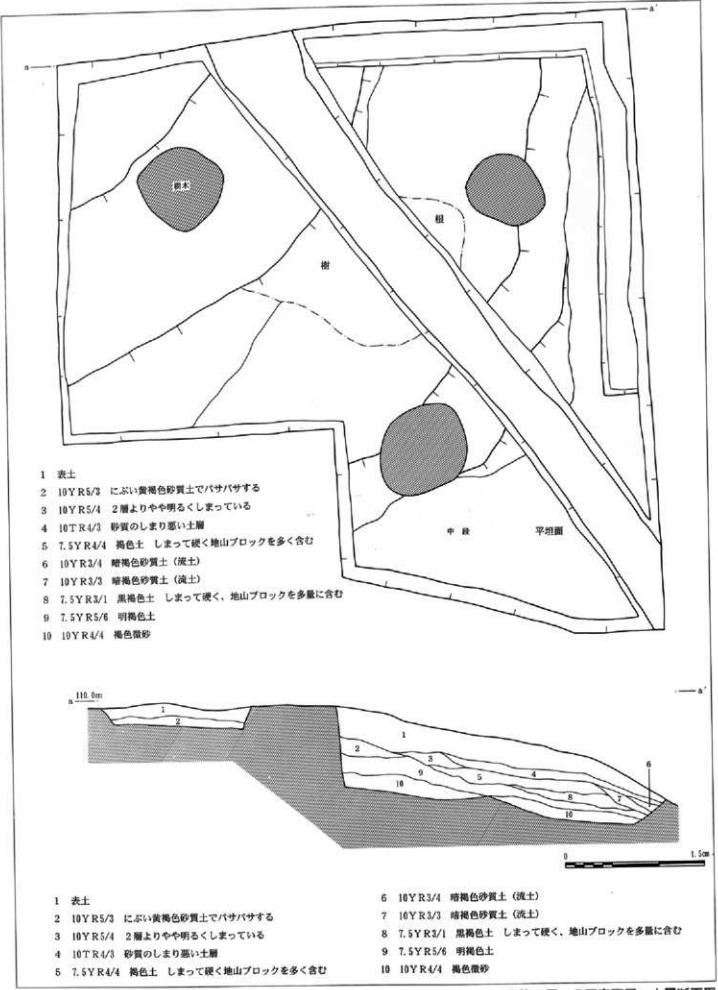
土層の状況は、1層は、笹根が侵入した表土、4層は、根の侵入が及ばない表土である。墳頂肩部に認められる2層は、以前の砂場造成や撤去等に伴う堆積土と考えられ、砂質のバサバサした土層である。確実に墳丘にかか



▲ F区段築部の土層状況

わると考えられる土層は、5層以下の土層である。5層は、褐色の締まった土層で、地山の灰褐色粒子を多量に含み、調査区西端部で急激に落ち込む状況にある。この落ち込みが、墳丘の段築平面に至る斜面に対応する部分と考えられる。斜面の落ち込みにそって、その上位に暗褐色の締まりのない砂質土（6および7層）があり、流れ込みによる堆積土である。5層より下位の上層は、いずれも締まって固く、地山のブロックを多量に含む黒色土や褐色土の互層状の堆積状況が認められる。

F区では、墳頂部平担面は後世の改変を受けているが、段築部は、一部、部分的に遺存している状況が把握できた。調査区北西端の等高線が張り出す箇所に拡張した部分を設けたが、ここでは比較的段築の平担面が残っていると言える。



(3) G区

G区は、北東部の墳頂肩部から墳丘斜面にかけて設けた調査区である。現在、東側の墳丘縁にそって水路が敷設されており、北側墳丘縁にも土掘りの小さな堰が巡っている。堰の南側は一段高い水田となっている。

1次調査で検出された墳籠縁の状況から想定すると、北東部の段築は、墳丘の東側の縁にそって敷設されている水路の北側端部付近に位置すると考えられる。当該調査区付近では、墳丘水路に囲まれて、墳丘が突出しており、推定される墳籠に近い部分まで墳丘が残っている可能性がある。さらに、部分的にテラス状の平担部が確認できることから、面的な墳丘面の検出に努めた。

墳頂部では、表土を取り除くと、現在の状況に対応するように肩部の落ち込み線が彫状に巡っている。しかし、表土および検出面に、近世の陶器片が多く混入しており、神社の敷地造成などによってかなり削平、改変された状況が伺える。従って、墳頂肩部の落ち込み線は、本来の墳丘の状況とは考えられず、墳頂周縁部に埴輪が据えられている痕跡も確認できなかった。

SX 1は、墳丘斜面にそって延びる盛土造構である。

断面は、蒲鉾状を呈し、斜面にそった上端部は現況の墳頂肩部に接続している。底面での幅は約1.5mで、盛土自体の高さは、斜面に沿っているため、下位では約80cmであるが、上位ほど低くなり、墳籠部からほぼ同一傾斜で墳頂部平担面に至る。一部にサブレンチを設け、盛土造構の土層について確認しが、暗茶褐色を呈する砂質の単一土層で構成され、近世の陶器片がこの周辺より出土している。

SX 1に接した両側の墳丘斜面には、不整形の不規則な掘り込み(SX 2～SX 4)が認められる。聞き取りによると、墳丘の東側から、天溝神社へ登る小径があったということである。SX 1は、土層の状況等から、後世に、墳丘の斜面に沿って一度に上を盛り上げて造成し

ている状況であり、神社へ至る小径の一部であったと考えられる。SX 2～SX 4は、その際の土取りの跡であり、周辺の墳丘を崩して土を盛り上げて造成したものと思われる。

調査区の中段で検出された平場は、本来の墳丘の段築平担部にあたる部分と考えられる。SX 1の北側では、上段下場から段築縁および、そこから落ち込む下段の墳丘面の一部を検出したが、南側は、段築平担面を斜めに削り取られた状況を呈している。検出された平量面の幅は、2.6mである。

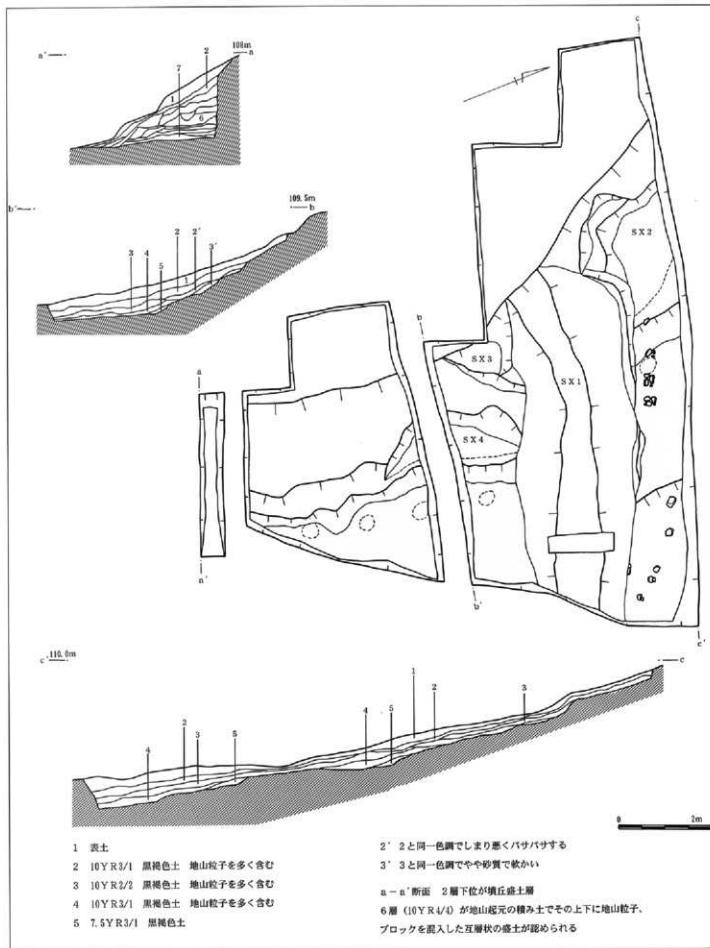
埴輪は、SX 1の北側で、上段下場付近や下段の墳丘面からまとめて出土した。しかし、かなり浮いた状態で、表土直下の2層および3層上面に含まれるもので、墳丘面に伴うものは認められない。後世の墳丘面の土取りやSX 1の造成等に伴う再堆積が流れ込みによるものと考えられる。

G区で確認された段築平担部は、地山起源の小さなブロックを多量に混入した締まった茶褐色土で築成されている。その平担面の上段下場の周縁にそって、おおむね円形を呈する黒色の土色変化がほぼ等間隔で検出された。その大きさは径約10～50cmで、SX 1の南側に4箇所、北側で1箇所認められ、その間隔は約1.1mである。

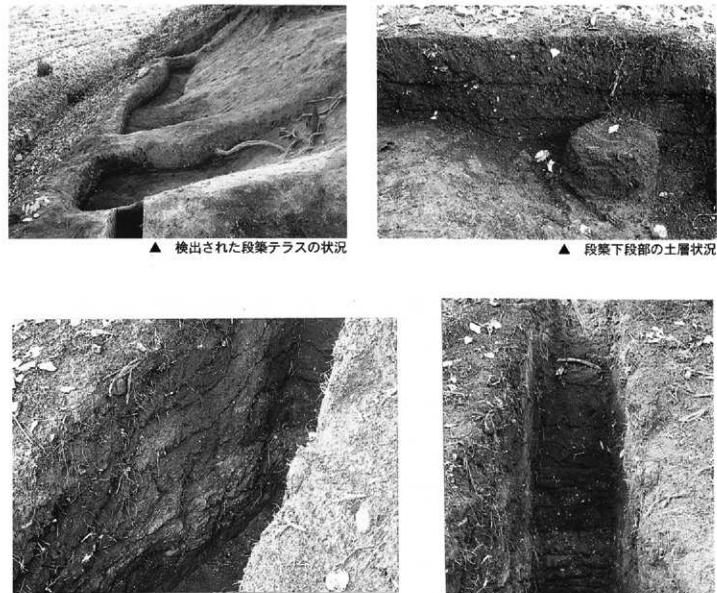
この部分にのみ根の侵入が見られ、掘り込まれたことは確実であり、埴輪の埋入方が抜き取り瓶である可能性が高い。なお、一部掘り下げて精査を行ったが、埴輪基底部が遺存しているものは確認できなかった。

当該調査区では、墳丘面を検討するため、一部、墳丘を掘り込んで段築の状況を確認した。それによれば、地山起源のブロックや粒子を含む互層状の明瞭な盛り土の状況が認められる。また、墳丘面では、上段下場や下段の落ち込む傾斜変換部に流れ込みと考えられる土層(5層)の堆積が確認できる。上段の墳丘斜面は、後世の改変が著しくなり荒れた状況にある。





▲第6図 G区平面図・土層断面図



(4) H区

H区は、天溝神社へ至る参道石段に接した東側に設けた調査区である。現地表は、斜面中位に部分的に平場が認められ、その周縁から裾をめぐる水路に一気に落ち込んでいる。調査区は、その平場の状況を確認するため、上段斜面から平場縁辺にかけて設定したが、石段に沿ってある樹木のため、限られた範囲でしか調査できなかった。

当該調査区では、現況の墳頂縁辺に近い北東隅に、土壠状の後世の掘り込み（SK5）がある。覆土は、黒褐色の粘質および砂質の土層で構成される。

上段斜面は、現況の墳頂肩から落ち込む段々状の斜面となっており、転々と角礫が散在するが、特に石垣の一部とは考えられない。調査区の西半部は、石段に沿うように粘質な茶褐色の固い土層が島状に認められる。これ

は、参道西側に設けたEトレンチでも同様であったが、石段の敷設に伴う地盤と考えられる。調査区の状況から検討すると、参道石段は、周囲の斜面より、一段高く造設されており、墳丘斜面を削り取った後、水田の耕作土のような粘質な土を盛って突き固めている状況が伺える。従って、墳頂肩部から続く上段墳丘斜面の様子は、後世に段々状に削平された結果であり、かなり改変を受けた状況にある。

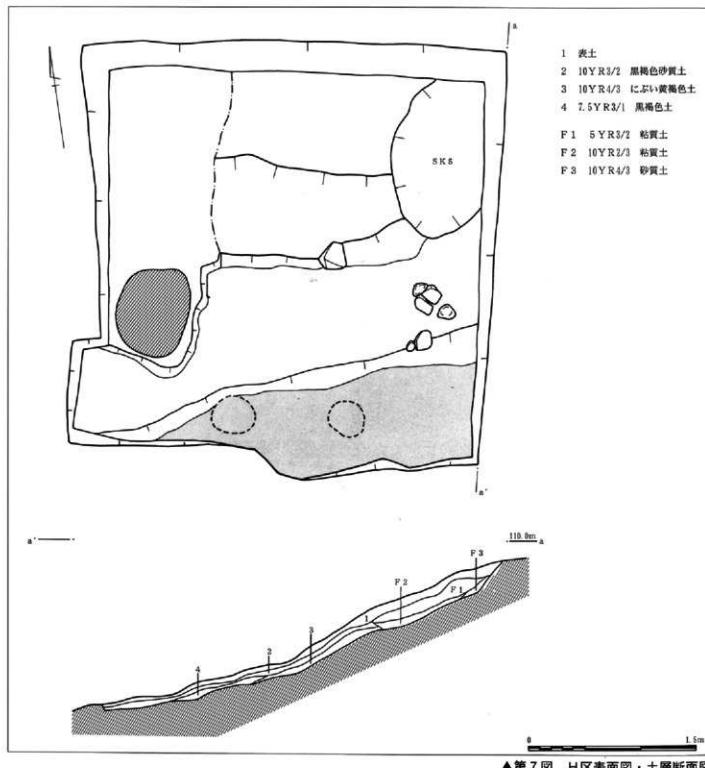
直接、墳丘に係わると考えられるのは、調査区南縁部にわずかに認められる段築平面部の一部であるが、極めて、部分的にしか残っていない。調査区南辺から、墳丘の斜面は急激に、裾の水田に落ち込んでおり、墳丘下段部もかなり削り取られた状況を示している。わずかに、上段下場に当たると考えられる段差があり、検出し、現在残っている段築平面部の最大幅は、約90cmほどしかな

い。

上段下層の周縁にそって、径約40cmのおおむね円形を呈する土色変化が2箇所検出された。両者の間隔は、約1mで、その部分にのみ箒根の侵入が著しく、G区で認められた埴輪の据え方か抜取り痕に対応するものと考えられる。



▲ H区全景



▲第7図 H区表面図・土層断面図

IV 第2次調査の遺物

今次の調査で出土した埴輪は、細片も含めて25点ほどである。大部分はG区から出土したものであるが、いずれも、かなり上位の浮いた状態での出土であり、直接埴丘に伴うものではない。他の調査区からは、墳頂に天満神社がまつられているものもある、近世以降の陶磁器片が多く、埴輪は認められなかった。

出土した埴輪は、円筒および朝顔形円筒埴輪の破片で、器財埴輪等の破片は含まれていない。従って、確実に朝顔形円筒埴輪の破片と認知できるもの以外は、円筒埴輪の破片として取り扱うこととした。

第9図1～3は、円筒埴輪底部の破片である。いずれも、外面に一次調整タテハケがあり、内面は、基本的に一次調整ヨコハケが施されている。1では、底部周縁の内面にのみ、止めを伴う連続したヨコハケがあり、外面に明瞭な黒斑が認められる。底径は29cm位と推定される。

2では、内面に一次調整ヨコハケの後、縦位の部分的なヘラナデがある。ヘラナデは、下の底部周縁から上位の胴部方向へ施されている。底径は約33cmである。

4～8は、円筒埴輪胴部の破片であるが、細片のみで、全様を知れるものは全くない。また、凸帯も剥落している。外面は、一次調整のタテハケがあり、6には、表面が風化し、明瞭ではないが部分的に二次調整ヨコハケが認められる。(ヨコハケの種別は同定不能) 内面は、一次調整タテハケのみのもの(6、7)とその後ナデが施されているもの(5、8)がある。

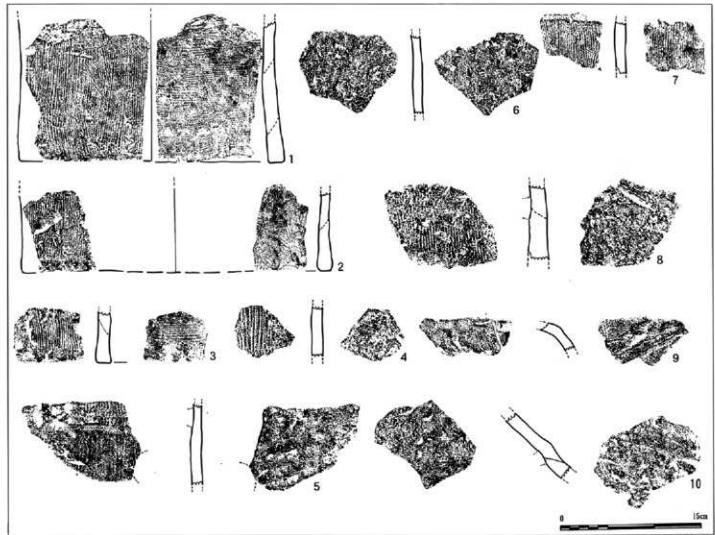
9は、剥落した凸帯の下位に円形のスカシ孔がある。

大塚天神古墳の円筒埴輪では、三条の凸帯を持ち、下から第二凸帯と第三凸帯の間に丸窓があることから、その部分の破片を考えられる。8も凸帯部分の破片である。

凸帯の貼り付けについては、外面の一次調整タテハケが連続することから、一気にタテハケを施し、凸帯を貼り付けた後、上下両側縁をヨコナデして仕上げている。

円筒埴輪では、基本的に外面調整として、一次調整タテハケを施し、スカシ孔の切取り、凸帯の貼り付けを行い、一部に二次調整ヨコハケを施すものがある。

内面調整は、底部に近い部分にヨコハケがあり、胴部にタテハケを施し、その後ナデが行われている箇所がある。凸帯の位置は、基本的に粘土の積み上げた接合部にあり、内面のナデはその付近に施されたと考えられる。



▲第8図 2次調査出土遺物

V 調査のまとめと課題

(1) 墳形と規模

前述したように、第2次調査は墳丘部分を対象としたものであり、墳丘の東側の状況については把握していない。

ボーリング柱による探査では、地山の落ち込みによる明瞭な張り出しが確認されていないが、周辺部分がかなり削平されている状況を考えれば、墳丘東側から対面した南側に張り出しが付設されていた可能性もある。

周溝については、第1次調査では調査区内で外側の立ち上がりを検出することができなかった。Cトレーニチの墳麓からトレーニチ西端部までは約5mであるが、周溝幅はそれ以上となる。墳丘は、西から東へ向かって張り出す台地の突端部に立地しており、地山のレベルも西側が高く東へ向かって傾斜する。

墳丘の成形状況を検討すると、墳麓は地山を削り出して成形し、旧表土の上に盛り土をしている。CおよびDトレーニチで確認された旧表土のレベルは、現地表から約80cm下である。(付近は約40cm程旧田面の上に盛土されており、旧田面からの深さは約40cm) 墳丘の大部分は積み土によって成形されていると考えられ、周溝部分の掘り上げた土を用いていれば相当量の幅が必要になる。墳丘の周溝が同一幅で全周するのか、西側の高い部分を幅広く掘り込んでいるのかは現在の調査段階では不明である。

今次調査のF、G、Hの各調査区から、段築の一部が検出されている。G区で確認された段築テラスの幅は、2.6m²であり、二段築であったと考えられる。現在の墳丘は、段築の下段部がほぼ削平された状況にあり、墳頂部も神社がまつられた時点ではある程度削平されたらしく、墳丘斜面も不規則な土取り状の掘り込みが認められ、かなりの変改を受けている。現段階では、径約50mの二段築成の円墳と推定されるが、周溝を含めた規模と墳形の確定が今後の課題として残されている。

(2) 墳輪の設置状況

これまでの調査で出土した埴輪は、いずれも二次的に堆積したものであり、原位置を保つものは確認できない。

墳麓部では、地山の落ち込み線の直上まで削平を受けている。従って、これまでの調査区内で墳麓部に埴輪が設置されていた形跡を確認することはできない。

段築のテラス部分については、いずれも後世の削平や改変によって部分的にしか残っていない状況があるが、G区およびH区の上段下場にそって埴輪の据え方か抜き取り痕と思われる掘り込みが確認された。その間隔は約1.1mであり、ほぼ等間隔である。掘り込み内に原位置を保った状態での埴輪の出土はないが、中段テラスに埴輪

が設置され、全周するものと推定される。

墳頂部平坦面の周縁部は、神社の敷地として改変されており、今次調査区での埴輪設置状況の確認は不可能であった。

(3) 出土埴輪と古墳の築造時期

出土した埴輪は、すべて円筒・朝顔形の破片のみである。円筒埴輪では、総高60~70cm、口径40~50cm位で、基本的に直立する胴部から上半部がラッパ状に広がり、口縁部が外反する形態を呈し、大型である。凸帯は三条で四段構成をなし、スカシ孔は上から二段目に切り込まれている。確認されるスカシ孔は円形のみである。

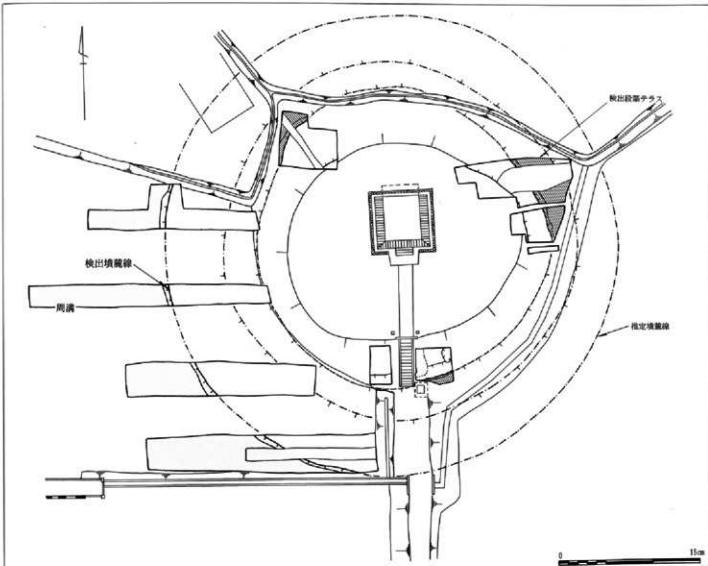
朝顔形埴輪では、断片的な破片のみで全体を把握し得る個体はないが、各部の状況から総合して、六条凸帯の七段構成のものと肩部凸帯が一条のみの五条凸帯六段構成のものがある。スカシ孔は円筒部上位一~二条の間にに入る。口径約50cmの大型のものと、それより小型のタイプがある。大型のものでは、総高1m前後と考えられる。埴輪製作にあたっては、何段階かの小工程を経ており、全体的に丁寧な造りである。粘土紐の接合幅は3~4cmで、外面に一次調整タテハケ、内面に一次調整タテ・ヨコハケを施し、凸帯の接合、上下縁のヨコナデ、スカシ孔の切り出しを行った後、一部に二次調整ヨコハケ、丁寧な内外面のナデを行っている。ナデはかなりの頻度で実施している。

焼成は、底部付近外面にも明瞭な黒斑があり、かなりの破片に黒斑が認められ、野焼きによるものであることは確実である。埴輪シンボリューム時の早稲田大学の車崎正彦氏の指摘など、これまでの検討成果を踏まえれば、埴輪自体は、典型的な製作技法、形態を呈しており、極めて畿内の色彩の濃い特徴が指摘されている。

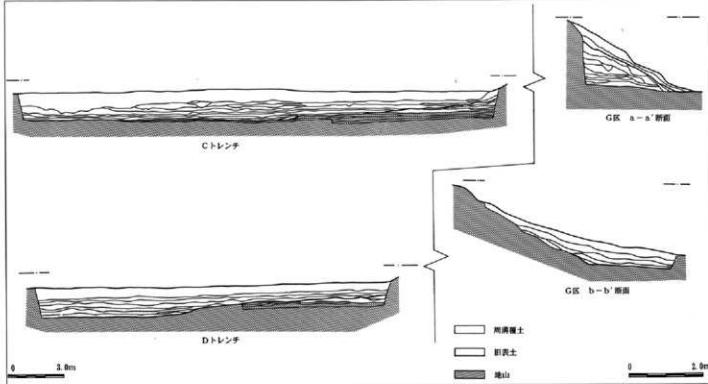
埴輪から想定される時期は、これらの特徴から川西編年II期に対応し、4世紀末葉頃を考えておきたい。

埴輪を樹立した高縁の古墳の存在は、畿内で中心とした王権勢力の葬送儀礼の反映であり、当地域に存在した首長との密接な関連があったことを示している。川西編年II期に並行する時期であれば多様なスカシ孔の存在が考えられるが、当該古墳の例では全て円形に統一されている。それが、地方的に後退する様相の反映であるかを含め、広い地域での類例との比較、検討が必要である。

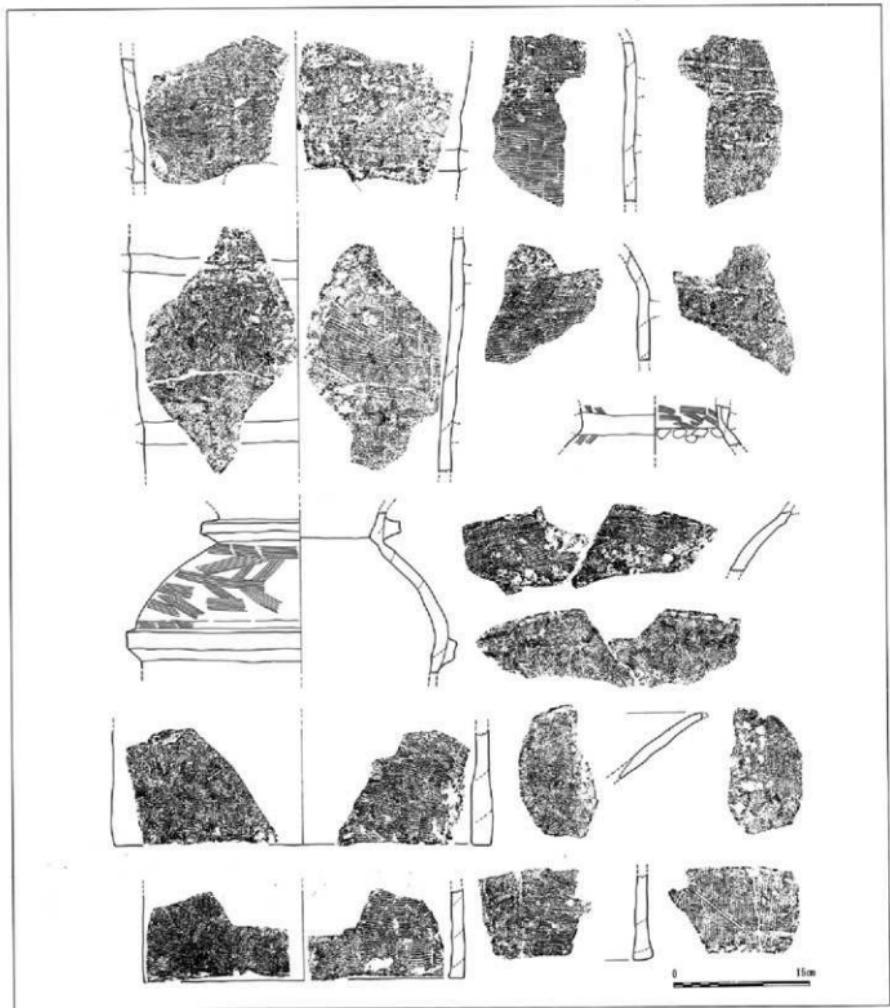
山形盆地は、古墳が造られた勢力の日本海側の北限に位置する地域である。分布をみると限り、4世紀の早い段階から古墳時代の集落が存在する。大塚天神古墳の被葬者は、初期の畿内を中心とする王権が、地方に勢力を伸長していく過程で、北縁の拠点として最初に中央の勢力と結び付いた人物であったのであろう。



▲第9図 古墳の推定全体図



▲第10図 土層断面集成図



▲ 第1次調査で出土した円筒・朝顔型埴輪実測図

山辺町埋蔵文化財調査報告書第7集
大塚天神古墳第2次調査概報

1999年3月 発行

山辺町教育委員会
〒990-0301
山形県東村山郡山辺町大字山辺1番地
023-664-6033